

団塊のカタログ

第3号

平成8年9月

「歌はヨにつれ、ヨは満足じゃ」といいますが、この昭和23年にはNHKのど自慢の第一回全国コンクール優勝大会が高橋圭三さんの司会で開催されまして、この方面での戦後復興も順調のようです。

前の年の22年には「啼^なくな小鳩よ」（岡晴夫）「雨のオランダ坂」（渡辺はま子）「星の流れに」（菊地章子）「夜のプラットホー

ム」（二葉あき子）「夜霧のブルース」（ディック・ミネ）「港が見える丘」（平野愛子）などがヒットしました。

————— ☆ —————

食うのがやっとの時代だったはずですが、だからこそ手軽で身近な娯楽を求める庶民のたくましいエネルギーが感じられます。

さて、この年のヒット曲は？

（片山～芦田～吉田内閣）

第2章

その2

0才の頃

昭和23年

音 楽

まずは「湯の町エレジー」からスタート。

♪伊豆の山々 月あわく
 灯りにむせぶ 湯のけむり
 あーあーあーあァ 初恋の
 君をたずねて 今宵また
 ギターつまびく 旅の鳥

なにしろ、ワシが生まれた年である。

当然、ナマの記憶などあるわけないが、一方で、ワシらの世代の「だれもがみーんな知っている」名曲なのである。

とはいうものの、こうやってあらためて歌詞をながめてみると、なんともイジけた男もいれたいもので、こんなヤツだからこそ女の方もイヤになってしまったのだろう。

そういつてしまえばミもフタもないが、パ

ターンとしてはご当地ソング・男純情バージョンといったところ。

そんな湯の町エレジー、歌ったのは今は亡^{おうみ としろう}き近江俊郎さん、ワシの名前（俊太郎）に一字足らずのところから昔から親しみを感じてはいたが、ワシらの世代にはちょっとばかり違和感を感じる歌手である。

戦中は「轟沈^{ごうちん}」（昭和19年）「かくて神風は吹く」（20年）などの軍歌ものを歌っていたらしいが、むろん記憶のかけらすらない。

————— ☆ —————

戦後間もない21年には、奈良光枝サンとデュエットで「悲しき竹笛」（♪ひとり都のたそがれに…）がヒットしたようだが、これも知らない。

結局、ワシらにとって歌手としての近江俊郎サンはこの「湯の町エレジー」だけであるが、バラエティーものなどでお見受けするい

かにも優しそうな笑顔と温厚そうな人柄は印象に残っている。



「湯の町エレジー」みたいなクラいのばかりが歌謡曲ではないゾと、戦後の日本を明るくしてくれた曲も登場した。

月は一れた空 そよぐ風
みなとでふね
港出船の ドラの音たのし
別れテープを 笑顔で切れれば
のぞみ はる
希望はてない 遥かな旅路
ああ 憧れの ハワイ航路

波の背を バラ色に
まっか
染めて真赤な 夕陽が沈む
一人デッキで ウクレレ弾けば
歌も懐かし あのアロハオエ
ああ 憧れの ハワイ航路

戦後わずか3年のこの頃、^{ぜいたく}贅澤は敵ではないにしても心強い味方ということもなかったし、1泊2日の国内旅行ジョートーの時代である。

また、カネとヒマがそこそこありあまっていたとしても、外貨準備不足から旅行目的の海外渡航が禁止されていたりして、ハワイ旅行などはよほどのオダイジンでなければならぬ夢の頃だった。

そんな時代背景を感じさせないほど、この「憧れのハワイ航路」の歌詞には優れた描写力と奇妙な説得力に満ちあふれている。

空・風・港・夕陽の美しい日本語に、ウクレレ・アロハオエなどの英語（3番にはホノルル・ホワイトホテルも出てくる）が適度に混じっていて、それがいかにもハイカラ（これは古い。死語）な感じで、船上の楽しそうな情景が目に浮かんでくる。

これに軽快なメロディーとの^{マッチング}組合せが実にピッタリで、戦後の名曲の一つであることは間違いない。



ギブミーチヨコレートってか！

この頃の男のコ（もう60代?）

あれからまもなく50年、1ドルは360円から100円そこそこになって、ハワイ旅行は憧れでもなんでもなくなってしまった。

そんな時代の流れをつくづくと感じさせてくれるが、前述の湯の町エレジーが白黒スタンダードなら、こちらは総天然色ビスタビジョン（これも古い）の趣きがある。

歌ったのは岡晴夫さん、通称オカッパルであるが、ワシらの世代にあまりなじみがある歌い手ではない。

パターンとしては「上海帰りのリル」と並ぶご当地ソング・海外版といったところ。

ちなみに、観光目的の海外渡航が自由化されたのは昭和39年（なんと！東京オリンピックの年!!）の4月、それまでは学術・芸能・留学・政治などの目的がなければ許可されなかったというのだから、今は昔である。

★

明るい歌なら笠置シズ子さんの「東京ブギウギ」も負けていない。

♪東京ブギウギ リズムうきうき
心ずきずき わくわく
海を渡り響くは 東京ブギウギ
ブギの踊りは 世界の踊り
二人の夢の あの歌 口笛吹こう
恋とブギのメロディー
燃ゆる心の歌 甘い恋の歌声に
君と踊ろよ 今宵も月の下で
東京ブギウギ リズムうきうき
心ずきずき わくわく
世紀の歌 心の歌
東京ブギウギ （ヘイ!）

ブギウギ略してブギ、本来の定義は「ピアノによるブルース演奏法のひとつ。元は黒人

音楽。4分の4拍子で書かれた曲の1小節を8拍にとって演奏する」モノらしいが、歌詞を拝見する限りではどこがブルースでどこが黒人音楽なんだと怒りたくなる程ダサイ。

それでも当時のオトナたちは「これぞブギ！これこそ西洋音楽！」と考えていたであろうことは容易に想像がつく。

実際にワシもそう思っていたし、昭和40年代後半になって宇崎竜童サンのダウントウン・ブギウギ・バンドのデビュー曲「スモーキング・ブギ」を聴いて、なるほど、どうやらこっちの方が本家のブギのようだワイと改めて悟ったのが現状である。

その四半世紀前に大流行した分家(?)のブギであるが、歌詞とリズムを重視して、旋律を軽視しているのが特徴で、日本版ラップ・ミュージックの趣がなくなもないが、それはともかく、ワシらにとってこの頃のブギはそんなになじみのある存在ではなかった。

この「東京ブギ」にしても、その後の「買ひものブギ」（♪今日は日曜 サンデーというのに…わて ホンマによういわんワ）にしても、そんな曲があったのは確かに知ってはいたが、しょせんはその程度、ナマの記憶としてはこの後のマンボとかロックン・ロール（いずれも日本では昭和30年頃から大流行）以降になる。

★

そうそう明るく浮かれてばかりばかりじゃいかんゾ、ついこの間までいまわしい戦争があったばかりではないか、とばかりに「異国の丘」が控え目に意地のヒットをする。

♪きょうも暮れゆく 異国の丘に
友よ辛かる 切なかる
がまん待ってろ 嵐がすぎりゃ
帰る日もくる 春がくる

歌ったのは竹山逸郎さんということだが、この人もワシらの世代にはなじみがない。

戦中もしくは戦前っぽい歌詞だが、れっきとした戦後のこの年のヒット曲で、戦地に残され、祖国へ帰れる日を待ちわびる兵士たちの切ない^{うた}気持ちを謳っているのは理解できるがその一方で、アジア各地での加害者の立場をこっちに置いて、ワシらも上官殿の命令でやむを得なかったのだワイと開き直っているようにとれなくもない。

この後、戦中を思い起こさせる暗い曲は姿を消すが、大戦の負の遺産（＝国家のツケ）がワシらの世代以降に引き継がれていくことだけは、どうやら間違いないようだ。

パターンとしては今はなき望郷モノ。

★

これらの曲の中で、今の20代でも知っている曲といえば「憧れのハワイ航路」だけではないかと思うが、ホノルル空港に着いた途端

♪晴れたそらーなどといきなり歌い出す日本人旅行客がいる・・・わけないってば。

☆

他には職業紹介モノ（東京シューシャインボーイ・東京のバスガール・街のサンドイッチマンなど）のさきがけともいべき長崎のザボン売り（小畑実^{おぼた みのる} ♪鐘が鳴る鳴る マリヤの鐘が…）とか、フランチェスカの鐘（二葉あき子^{ふたば} ♪ああ あのひとと別れた夜は…）懐かしのブルース（高橋三枝子 ♪古い日記のページには…）君待てども（平野愛子 ♪君待てども 君待てども…）三百六十五夜（霧島昇・松原操^{みさお} ♪緑の風に おくれ毛が…）などの演歌本流失恋モノもヒットするが、いずれもワシらにはあまりなじみはないし、前出3曲ほどの親しみもない。

★

次号はハイおまた、この人なら世代を超える・・・美空ひばりサン特集です。



この頃の女のこ（今50代）